

# 尖頭器石器群の発達と石材消費の展開

山 地 雄 大

## はじめに

本研究の目的は、(1) 狩猟採集民の移動形態を復元し、(2) それらの通時的な推移を読み解いてゆくことで、(3) 尖頭器石器群の発達と石材消費の関連性を整理し直すことである。

尖頭器石器群の成立は、旧石器時代における技術的な画期の一つとして、古くから注目されてきた(稲田1969)。そこでは、すぐさま尖頭器を主体とする石器群へと移行するわけではない。尖頭器は、当初ナイフ形石器に少数伴う形で出現し、ナイフ形石器と共存しながら次第に置き換わってゆく過程が整理されている(諏訪間1989)。

しかしながら、こうした石器群の推移の背景そのものは十分に検討されていない。そこで本研究では、こうした点について、石器群を携えた人々の石材消費の様態と関連づけることで捉え直す。なかでも尖頭器石器群が発達する関東平野西南部に焦点を当てる。

## 1 尖頭器石器群研究の論点と研究の方法

これまでの尖頭器石器群研究では、とりわけ編年研究が重点的に進められてきたが、石器群の推移の背景そのものは積極的には問われてきていない。とりわけ、石器製作技術の発達(芹沢1956)や尖頭器の伝播といった文化的な広がり(檜田1987)として理解されやすい。

しかし1990年代以降、こうした点ばかりを想定することができない点が議論されてゆく(佐藤1995など)。石材産地から消費地へと移動しながら石器製作を進めていった結果(関口1992)とするなど、当時の人々の行動形態と関連した議論が進められ始めている。そこでは、新たな視点が提示されながらも、尖頭器とナイフ形石器が共存することの意味はなおも問われないままとなっている。

こうした点を踏まえ、石材消費や移動形態と尖頭器製作の関連性を読み解いてゆきたい。そのためには、石器群をめぐる技術が、狩猟採集民の様々な行動のなかで組織化されているとする「技術組織論」(阿子島1989)の視点が不可欠となる。こうした視座から尖頭器石器群を眺めるとき、移動生活の様々な局面で尖頭器の製作技術が柔軟に発揮されていた可能性すら見込まれる。

具体的には、時間軸の整理を行ったうえで、(1) 時期ごとの石材利用の特徴や石材消費の空

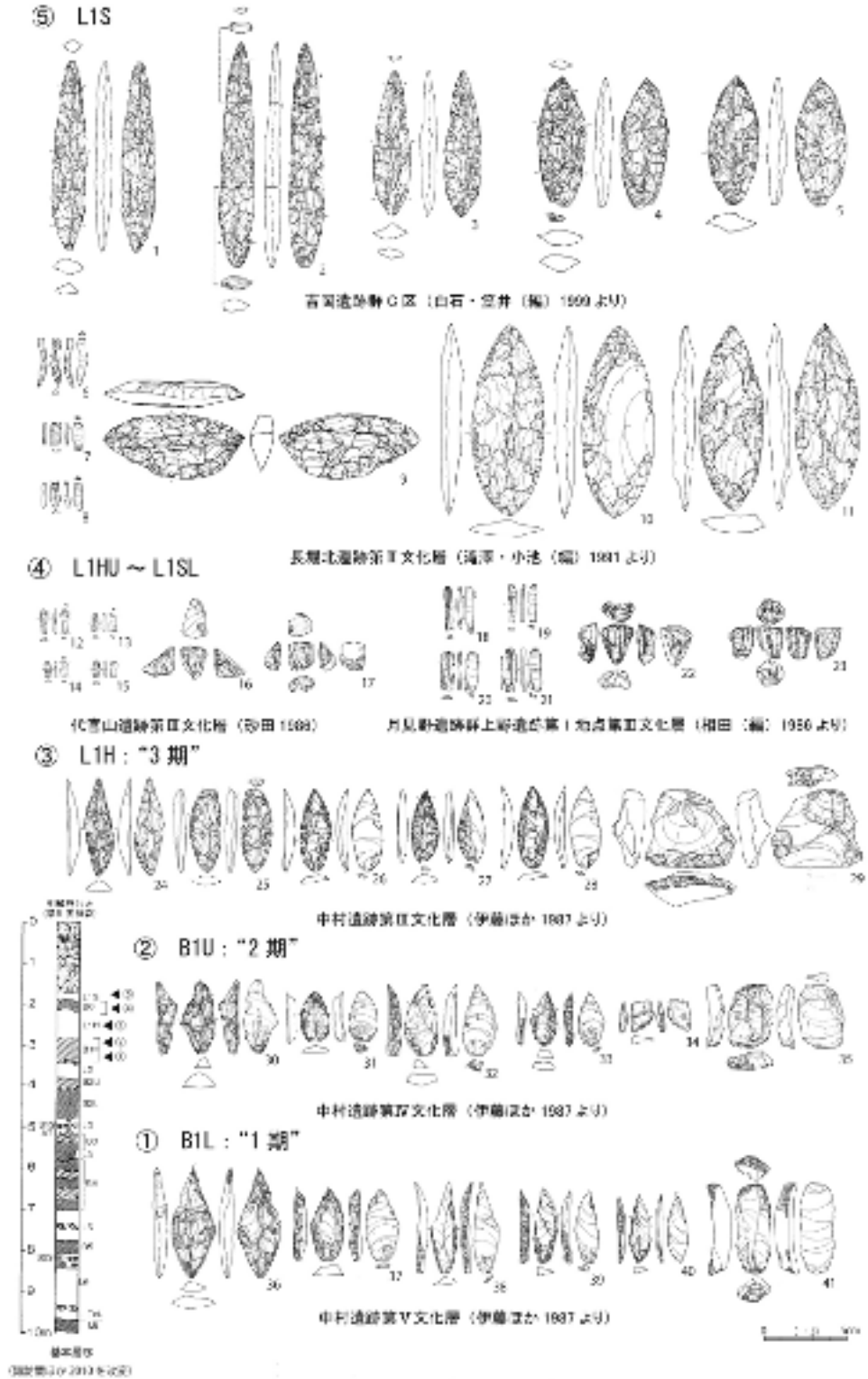


図1 尖頭器出現以降の石器群の変遷 (相模野台地)

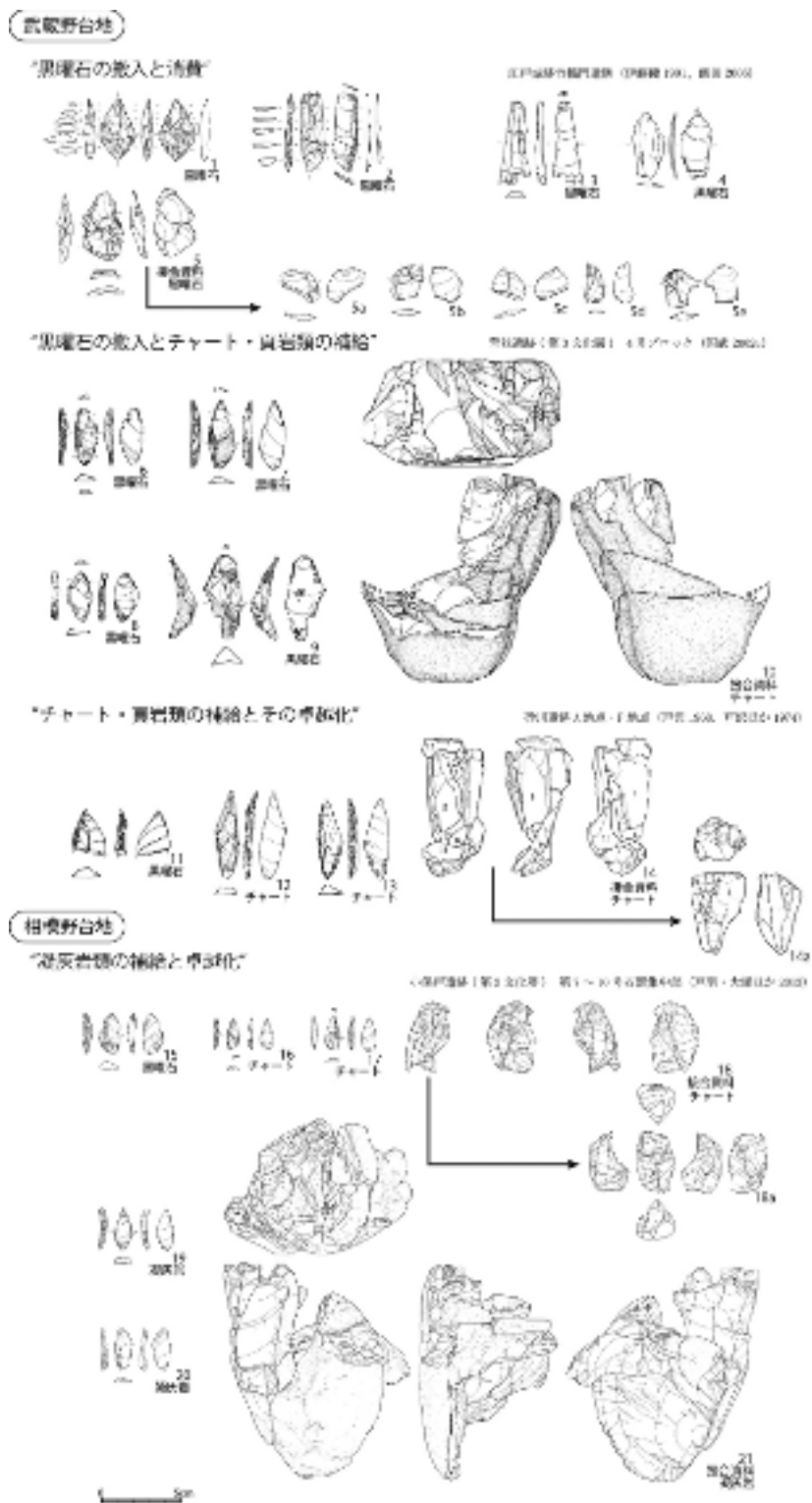


図2 1期における石材補給と消費

間的な展開について検討する。その後、(2) それらの通時的な推移と製作技術の関連性を読み解いてゆくことで、(3) 尖頭器石器群の顕在化と移動形態の関連性を整理し直す。

## 2 尖頭器石器群の変遷と製作技術

ここでは、先行研究を最大公約数的に整理することで、時間軸の整理を試みた。その結果、関東平野西南部では3時期にわたる尖頭器石器群の変遷を想定した(図1)。1期(相模野台地L2層~B1層下部)は、ナイフ形石器を主体に尖頭器が少数共伴し、両設打面をもとにした縦長剥片剥離技術を特徴としている。尖頭器には両面調整技術により製作される資料も少なくない。次に2期(相模野台地B1層下部)になると、尖頭器が増大してくる。打面転位を繰り返す縦長剥片技術を基盤としながら、ナイフ形石器と尖頭器が製作される。最終的に3期(相模野台地L1H層)を迎えると尖頭器が卓越化した石器群が顕在化する。

## 3 1期における石材消費とその空間的展開

1期における石材構成とその地域的特徴を整理したうえで、それぞれの石材の獲得から消費にいたる過程を遺跡ごとに検討した。その結果、遠隔地石材を搬入するとともに、次第に在地石材を繰り返し補給してゆく動きが読み取れる(図2)。こうした石材の循環は、武蔵野台地から相模野台地へと繰り広げられる傾向にある(山地・太田・藤山2019)。遠隔地の石材である黒曜石が武蔵野台地を中心に搬入されるとともに、それらが多摩丘陵や相模野台地へと持ち越されてゆく。こうした過程では、次第に在地石材の補給がそれぞれの地域で進められてゆく。武蔵野台地では、在地のチャート・頁岩類の補給が進められてゆき、さらに多摩丘陵や相模野台地へと持ち越されてゆく。相模野台地に至ると、黒曜石やチャート・頁岩類が搬入されるとともに、新たに在地の凝灰岩類の補給が進められていたとみられる。

こうした過程では、製作される器種も異なっている。尖頭器は遠隔地石材と結びつき、製作痕跡が明瞭に残されない。これに対して、ナイフ形石器は、在地石材を繰り返し補給してゆくなかで、活発に製作されている。

## 4 2期における石材消費とその空間的展開

2期では、黒曜石を徹底的に消費してゆく動きが明瞭に読み取れる。こうした石材消費は、相模野台地と武蔵野台地との間を双方向的に進められていた可能性がある(図3)。黒曜石は均等にもたらされるわけではなく、相模野台地の特定地点に原石に近い状態で搬入されている。それを相模野台地はもとより、多摩丘陵や武蔵野台地にかけて、徹底的に消費しながら石器製作が進められてゆく。さらに武蔵野台地に至ると、黒曜石を消費しながらも、在地のチャート・頁岩類の補給が進められてゆく。これらは、再び多摩丘陵や相模野台地へと石核の状態を持ち

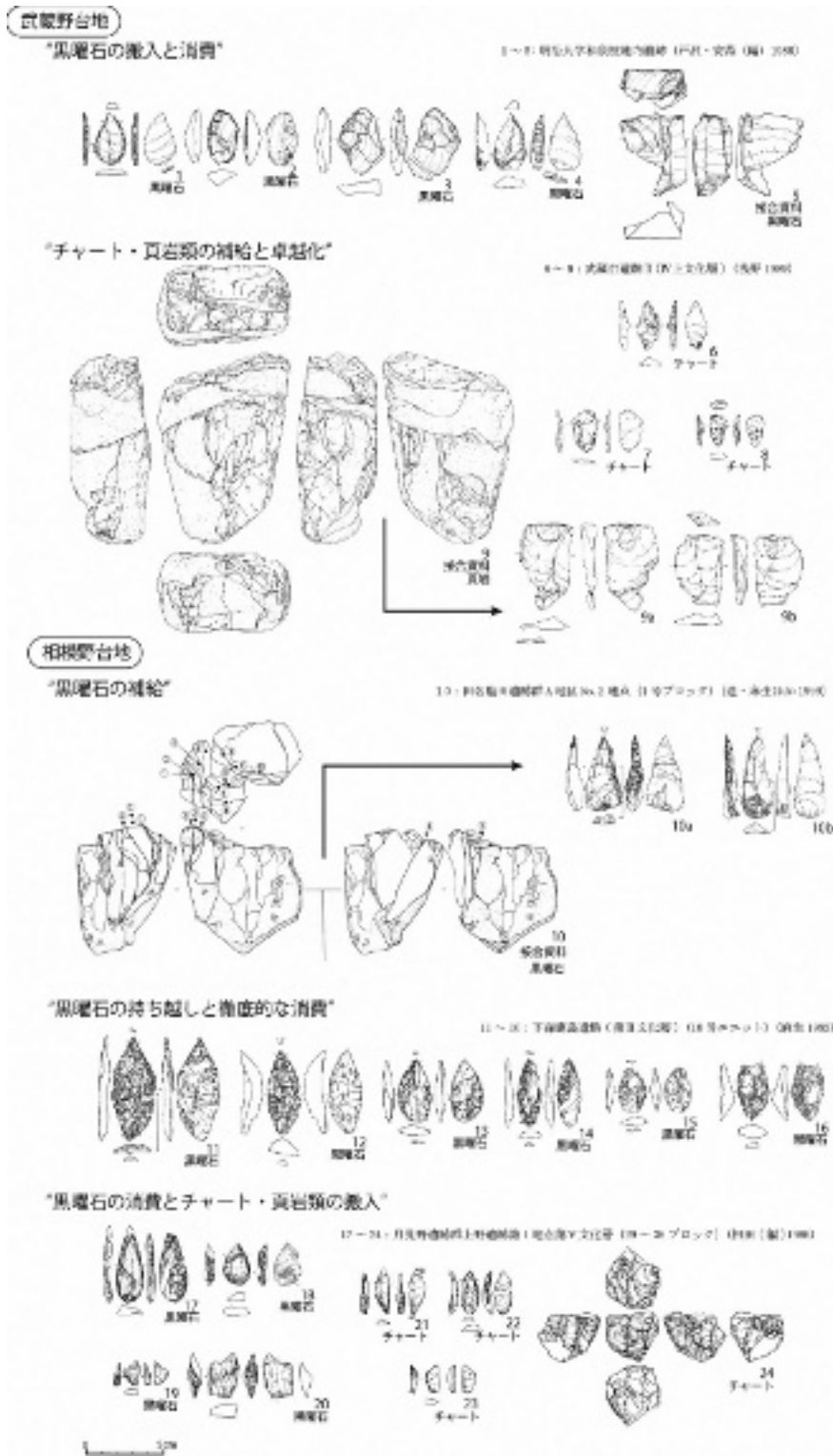


図3 2期における石材補給と消費

武蔵野台地

“チャート・頁岩類の補給と活発な尖頭器生産”

武蔵野台地（関東文化圏）（伊藤ほか2011）



“尖頭器の細部調整”

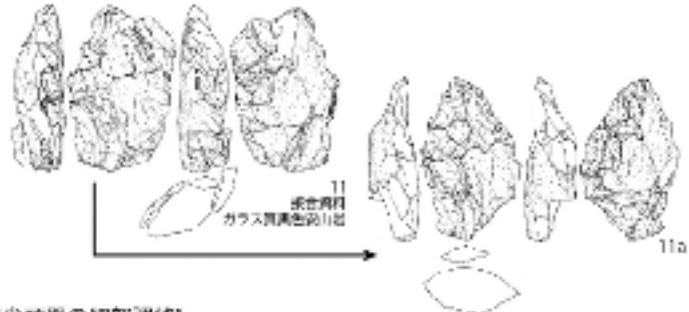
武蔵野台地（伊藤 1999）



相模野台地

“安山岩類の補給と活発な尖頭器生産”

相模野台地上野遺跡第1地区（関東文化圏）2PC5～25・27ブロック（樋口 1996）



“尖頭器の細部調整”

14・15：相模野台地上野遺跡第1地区（関東文化圏）2区51ブロック（伊藤 1996）  
16・17：上野遺跡上野遺跡第2地区（関東文化圏）（大前ほか2007）

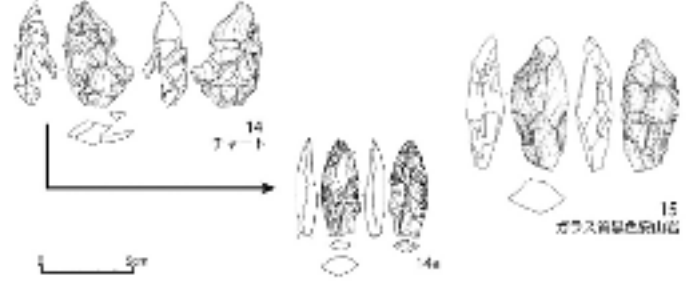


図4 3期における石材補給と消費

越されていったとみられる。

こうした過程では、常に尖頭器が製作されるわけではない。黒曜石を消費してゆく途上に限って製作される傾向にある。

### 5 3期における石材消費とその空間的展開

3期を迎えると、特定地点に石器製作が偏在化してくる。特定地点での石材の一括搬入と集中生産およびそのほかの地点での細部調整を繰り返しながら石材消費が進められてゆく（図4）。こうした動きは、相模野台地と武蔵野台地の間を双方向的に繰り返されてきた可能性が高い。安山岩製の尖頭器の活発な製作は、相模野台地に偏在している。相模野台地では、安山岩が特定地点に原石に近い状態で搬入されると同時に、尖頭器製作を集中的に行う。それを相模野台地や多摩丘陵、さらには武蔵野台地へと細部調整を行いながら持ち越してゆく。武蔵野台地へと至ると、今度は在地のチャート・頁岩類が新たに補給され、そこで再び尖頭器を集中的に製作してゆく。それらを多摩丘陵や相模野台地へと細部調整を行いながら持ち越していったとみられる。

このように、石材の一括搬入と尖頭器の集中生産へと推移するなかで、尖頭器石器群が発達を遂げるわけである。

### 6 尖頭器石器群の顕在化と石材消費との関連性

これまでの検討を踏まえ、尖頭器石器群の顕在化と石材消費との関連性を検討した。

1期では、遠隔地石材を持ち越しながらも在地石材を活発に補給してゆくことで、ナイフ形石器を恒常的に製作していた。一方で、尖頭器の製作痕跡は、関東平野では明瞭に残されていない。黒曜石と強く結びついており、中部高地の黒曜石原産地周辺において尖頭器の製作が行われているなど、ナイフ形石器と尖頭器の製作のタイミングが異なっていたとみられる。続いて2期では、黒曜石を中心に運用するが、石材の補給が限定的になってくる。

1期のように、繰り返して在地石材を補給してゆくのではなく、黒曜石を徹底的に消費してゆく傾向に変わってくる。こうした動きと連動して、素材の規格性が低調になり、二次調整が活発に展開し始めることで、尖頭器とナイフ形石器が共存するわけである。

さらに3期を迎えると、石材の搬入地点や製作地点が偏在化してくる。特定地点に石材が一括搬入されるなかで、扁平な礫を含めた多様な素材が利用され、規格的な素材生産はさらに低調になる。加えて、特定の原産地との結びつきを強めることで、大量に石材を消費する土台が整うわけである。こうして、尖頭器が卓越することになったと考えられる。

## おわりに

このように、尖頭器石器群の顕在化は、ともすれば技術的な発達（芹沢 1956）や機能面の差異（滝沢 1964, 須藤 1989）、さらには文化的な広がり（樫田 1987, 安森 1988）として捉えられやすい。しかし、本研究で指摘したように、そこには当時の狩猟採集民の石材利用の様態に応じた柔軟な技術の運用が存在した可能性すら見込まれる。本論では十分に明らかにできていないが、今後、こうした観点から検討してゆくことで、尖頭器石器群が顕在化した背景を具体的に読み解くことができると考えている。

## 参考文献

- 阿子島香 1989 『石器の使用痕』 ニューサイエンス社
- 安森政雄 1988 「和泉校地遺跡の性格」『明治大学和泉校地遺跡発掘調査報告書』, pp.60-72, 明治大学考古学研究室
- 稲田孝司 1969 「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』第 15 巻第 3 号, pp.3-18, 考古学研究会
- 樫田誠 1987 「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第Ⅲ文化層のナイフ形石器と槍先形尖頭器」『大和市史研究』第 13 号, pp.74-106, 大和市役所
- 佐藤宏之 1995 「技術的組織・変形論・石材受給—下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察—」『考古学研究』42-1, pp.27-53, 考古学研究会
- 須藤隆司 1989 「中部槍先形尖頭器文化の成立」『長野県考古学会誌』第 59・60 号, pp.111-134, 長野県考古学会
- 諏訪問順 1989 「相模野台地における尖頭器の様相」『長野県考古学会誌』第 59・60 号, pp.217-235, 長野県考古学会
- 関口博幸 1992 「槍先形尖頭器の変容過程—相模野台地における槍先形尖頭器の製作と廃棄プロセス—」『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』10, pp.1-26, 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢浩 1964 「尖頭器」『考古学手帖』23, 2-5, 塚田光
- 山地雄大・太田千裕・藤山龍造 2019 「石材構成に見る『砂川期』の移動形態」『シンポジウム 砂川遺跡—旧石器時代研究の過去・現在・未来—予稿集』, pp.30-33, 明治大学黒耀石研究センター